

ら、一般的な利用範囲をこえる数のダウンロードが連続してシステムティックに行われた（1時間に連続して International Journal of Geomechanics から127論文、Journal of Geotechnical and Geoenvironmental Engineering から88論文が一括ダウンロードされた）ため、KUINS- プロキシサーバ4台中の1台（IPアドレス130.54.130.228）を経由したAIPサイトへのアクセスが遮断された（エルゼビア社の良いところは、この遮断措置が無い）。現状では、KUINS のログは通信の秘密保護のため法的な根拠がない限りモニタリングできないとの理由で、アクセスログによる利用実態の把握は困難であるという。従って、附属図書館は、学会・出版社に対し、調査報告義務を果たせない状況にあるが、これは京都大学として正しい（恥ず

かしくない）姿なのだろうか？また、視点を変えれば、この不正使用行為は、京都大学に所属する多くの研究者に多大な損害を与えている。多発する不正使用問題への対応策について、「図書館機構」は早急に検討し、研究者が納得できる回答を提示してもらいたい。

最後に、電子ジャーナルは安全なのだろうか？もし予告無く電子ジャーナルを提供している出版社が倒産、あるいはサイバーテロにより電子ジャーナルシステムが、突然、崩壊した場合の対応策はあるのだろうか？「京都大学は冊子体（紙雑誌）を全て止めて、電子ジャーナルのみとする様な大学ではない。京都大学で冊子体が必ず一部あるというのが大前提である。」という考え方に、私は強く賛同する。

（こんどう てるゆき）

長尾前総長揮毫による額をいただく

長尾前総長揮毫による額は、附属図書館1階吹き抜けにある階段の2階側壁に掲げている。



額には、「垂輝映千春」（輝を垂れて千春を映さんとす）（ヒカリをタれてセンシュンをテラさんとす）と書かれている。

この文言は、李白の詩「古風」（こふう）「其一」の一節で、「古風」は、むかしふうという意味で、李白が六朝風のきらびやかな在来の詩

にあきたりず、骨格のしっかりした剛健な詩風を復活させようと創ったものである。

本学創立100周年記念式のために作曲家藤家湊子氏に委嘱して創られた式典曲名にはこの一節がそのまま使われており、「その光りが千年の後まで照り映えるような、すばらしい詩を生みたいと思う」という意味で、京都大学の気概を込めたという（『京大広報』1997.11号外より）。

長尾前総長も、学生諸氏に在来の有り様に満足することなく、未来に向かって果敢に挑戦して行ってほしいとの願望を込めて書いてくださったと思う。

なお、長尾前総長揮毫作品には、「古風」其一の抜粋を行書で書かれたものもあり、4階教官談話室に掲げている。